

ベートーヴェン交響曲

# 第9番「合唱付」演奏会

「エグモント」序曲 作品84

ベートーヴェン交響曲第9番「合唱付」二短調作品125

指揮 秋山和慶

管弦楽 東京交響楽団

独唱 (ソプラノ)黒川和子

(アルト)永井和子

(テノール)牧川修一

(バス)高橋啓三

合唱 東北混声合唱団

(合唱指導 岩田正彦)

'85. 12. 15(日) PM3:00

深谷市民文化会館大ホール



## 交響曲第9番 ニ短調作品125「合唱付」

第9交響曲がウィーンで初演されたのは1824年である。その時彼は54歳、それから3年たらずしてこの世を去った。ベートーヴェンは1800年に交響曲第1番を発表して以来、早いペースで交響曲を書き続けた。1814年に交響曲第8番を発表してから第9番まで10年という長い空白がおかれている。1823年「莊厳ミサ」が第9交響曲に先立って完成した。

ベートーヴェンが第9交響曲の構想をいつごろから抱いていたかは明らかではないが、ベートーヴェンの残したスケッチ帳によれば第9交響曲の構想は、1817年秋から翌年夏にかけて第一楽章のプランがほぼ完成していたことを示している。終楽章、ベートーヴェン白らの言葉「おお友よ、これらの調べではなく、もっと快よくそして喜びに満ちた歌を歌いだそう」を初めに、シラーの詩による合唱曲が組みこまれ、1824年に全曲が完成された。

第一楽章 アレグロ・マ・ノン・トロppo、ウンポコ・マエストーゾ、すばらしく深く雄大な楽章である。神秘的な導入部は暗い混とんとした闇の状態から第一主題の断片がひらめき、次第に音量を増して巨大な苦しみを背負ったテーマがまるで宇宙がなだれを打って崩れるように出現する。魂の努力と嵐のような運命の力との闘いが続き、最後に、第一主題が再びその苦悩の姿を現わしてこの楽章を終わる。第二楽章 モルト・ヴィヴァーチェ、早いテンポ、猛烈なティンパニーの強打、そして活気に満ちた進行。中間部では幸福を夢みるような民謡的旋律が入る。第三楽章 アダージョ・モルト・カンタービレ、美しいメロディクな楽章である。宗教的な静けさをもつ第一主題と天国の花園のように優美に歌われる第二主題が交互に現われて変奏されていく。楽章の終わりに近づくとき金管楽器の激しいファンファーレが鳴り響く。第四楽章 引き裂くような導入句に続いて初まるこの楽章の第一楽章の冒険、第二主題の舞踏のリズム、第三楽章の最初の主題が回想され、低弦により否定されてしまう。そして喜びのテーマが現われ、低弦から高弦へと受渡され盛り上がり、荒々しい導入句が反復されバリトンの「おお友よ、これらの調べでなく、もっと快くそして喜びに満ちた歌を歌おうではないか」と初まり3人の独唱者、合唱が加わり「全人類はすべて兄弟である。相抱いて神の前にひれ伏そう。」というシラーの詩が歌われていく。行進曲風のテノールのソロに続き、莊厳な男声合唱、力強いフーガの部分、オーケストラは一層発展し、盛り上がりゆく。そして終曲部ではオーケストラ、四重唱、合唱が最も速いテンポでぐんぐん上昇し、盛り上がるの頂点で終る。

## 「エグモント」序曲 作品84

1810年、アダムベルガーがクレールヒェンの役で、ゲーテの「エグモント」がウィーンのブルク劇場で上演されたとき、ベートーヴェンは、序曲とクレールヒェンの歌や幕間の音楽などを作曲して劇の上演を音楽化した。「コリオラン」序曲の悲劇的なものに対して、これは暴君の压制下におかれた英雄エグモント伯の気迫を象徴するように壮大をきわめ、それでこの2つの序曲は相対的な対曲となっている。

「エグモント伯は祖国のスペインの压制から救おうとして捕われ、死刑を宣告される。愛人クレールヒェンはかれを救い出すことに失敗して自殺するが、かの女の幻影は自由の女神となって獄中のエグモントを鼓舞する。」というのが劇の筋である。これも前にのべた他の諸序曲と同様、序奏をもつソナタ形式によった序曲であるが、第一主題も第二主題もすべて悲愴な性格をもった重厚なもので、クレールヒェンを表わすような対照的な優雅な主題は現われない。



## 指揮 秋山和慶

東京に生まれる。桐朋学園大学卒業。指揮法を斎藤秀雄に師事。1964年東京交響楽団を指揮してデビューの後、同団の専属指揮者となり、1968年からは音楽監督・常任指揮者に就任する。

海外における活躍はめざましく、アメリカ交響楽団、トロント交響楽団、バンクーバー交響楽団、サンフランシスコ交響楽団、クリーブランド管弦楽団、ロサンゼルス・フィル、ニューヨーク・フィル、ボストン交響楽団、そしてヨーロッパではロイヤルフィル、ケルン放送交響楽団、ベルリン放送交響楽団、バイエルン放送交響楽団などを指揮し高い評価をうけている。1972年よりバンクーバー交響楽団の音楽監督・常任指揮者に就任し、1973年から78年まではアメリカ交響楽団の音楽監督も兼務した。

現在国内では、東京交響楽団の音楽監督・常任指揮者のほか、大阪フィルの首席客演指揮者をつとめている。そのほかNHK交響楽団をはじめ主要オーケストラの定期公演に客演し好評を得ている。



## 東京交響楽団

1946年(昭和21年)東宝交響楽団の名で創立され、1951年に東京交響楽団と改称して今日に至っている。歴代の指揮者には、近衛秀麿、上田仁、つづいて1968年からは秋山和慶が音楽監督、常任指揮者に就任している。また名誉指揮者にアルヴィド・ヤンソンスとズデネク・コシユラーを、指揮者に遠山信二、小林研一郎、矢崎彦太郎を擁し、客演に若杉弘、山田一雄、小泉和裕などを迎えて充実した陣容で公演を行っている。その内容は定期演奏会のほか、多種にわたる特別演奏会、オペラ、バレエ、テレビ出演などのすべてを網羅している。

1976年秋には楽団創立30周年記念事業として、初の海外公演を行い、カナダ、アメリカ、メキシコの3カ国15都市において20回の演奏会を行い、また1982年には大韓民国音楽祭に招かれて2回公演し、いずれも内外から賛辞をあつめて、国際文化交流の実を挙げられた。



## ■ソプラノ 黒川 和子

東京芸術大学卒業、同大学院オペラ科修了・畑中良輔に師事。日伊コンコルソ第一位。ブッチーニ「トスカ」でタイトルロール。コダーイ「テ・テウム」、ヤナーチェク「スラブミサ」、ヴェルディ「レクイエム」等のコンサートで好演。二期会会員

## ■アルト 永井 和子

国立音楽大学卒業、同大学院修了。オペラ研修所第四期生修了。中山悌一、伊藤京子、小松道子の各氏に師事。1984年、民音コンクール第一位。オペラ研修所入所以前より数々のオペラ体験を持ち、研修所の修了公演では「蝶々夫人」のスズキを演じ、好評を得た。二期会会員

## ■テノール 牧川 修一

武蔵野音楽大学卒業、宮原卓也、正田生次郎、石田隼に師事。1980年より一年間ローマに留学し、ヨランダ・マニョーニに師事。ジュネス音楽祭にヴェルディ「レクイエム」のテノールソロを歌ってデビュー。以後主に、コンサート歌手として宗教曲、第九ソリストとして活動。二期会会員

## ■バス 高橋 啓三

東京芸術大学卒業。磯谷威、中山悌一、渡辺高之助に師事。第44回音楽コンクール第二位。「カルメン」「トスカ」「ファウスト」等多数のオペラに出演。コンサートでも「メサイア」、バッハ「カンタータ」、モーツァルト「レクイエム」、ベートーヴェン「第九」のソロとして活躍。二期会会員

## ■合唱 県北混声合唱団

ベートーヴェン交響曲第九番を私たちの手で歌おう」の呼びかけに、たくさんの人の強力な応援を得て、昭和51年6月2日、県北第九合唱団としてその産声をあげました。200人の大合唱団を組織し、同年12月熊谷会館において堂々と声高らかに「第九」を歌いあげました。この演奏会は大成功で、その後毎年12月には「第九」の演奏会を開催しています。「第九」のほかに、ビゼルの「カルメン」、ショスタコーヴィッチの「森の歌」、モーツァルトの「レクイエム」、ヴェルディ「レクイエム」をオーケストラの伴奏で演奏しました。

昭和57年1月より常任指揮者には岩田正彦先生を迎え、また昭和59年2月から名称を県北混声合唱に変更し、だれでも入団でき、いろいろな曲を練習し、「歌心ある合唱」をめざした活動が続けられています。

# 深谷市民文化会館

〒366 深谷市本住町17-1

☎0485 (73) 8765